

Title	『運使郭公復齋言行録』の編纂と或るモンゴル時代吏員 出身官僚の位相
Author(s)	飯山, 知保
Citation	東洋史研究 (2008), 67(2): 229-254
Issue Date	2008-09
URL	http://dx.doi.org/10.14989/147174
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

『運使郭公復齋言行錄』の編纂と或るモンゴル時代 吏員出身官僚の位相

飯 山 知 保

はじめに

一 『言行録』『敏行録』の傳存過程

二 郭郁の生涯と『言行録』『敏行録』

(一) 郭郁の出仕経路と官歴

(二) 『言行録』『敏行録』編纂の背景

三 「儒を以て吏を飾る」——儒者としての郭郁

(一) 侯克中への師事

(二) 中央官界での交遊

(三) 江南在任中の郭郁

おわりに

はじめに

「官」と「吏」との関係は、モンゴル時代の中華地域における知識人を考える際、最も重要な問題の一つである。當時、中央および地方官衙における高位の吏員には資品官への昇進⁽¹⁾（入流）経路が設定されており、科擧再開に際して一時その

昇進が従七品に制限されたものの、至治三（一三三三）年には四品に引き上げられ、⁽³⁾その後も吏員の資品官への昇進と高位官職への到達はモンゴル時代を通じて維持された。こうした吏員の昇進経路や地方行政における地位については、牧野修二氏、許凡氏、Endicott West氏らによる先行研究があり、かなり具体的な知見が得られている。⁽⁴⁾かかる吏員からの入流経路は金國の制度を基礎としたと考えられるが、金代では入流者数ははるかに少なく、また官制上の重要性も高くはなかった。⁽⁵⁾モンゴル時代の吏員に高位官職への昇進が保證され続けた背景には、モンゴルによる實務能力の重視や、科擧が長い間實施されなかったことと出仕経路の多岐化、そして科擧の實施後もその及第者数が少数であったことなどが考えられる。ともかく、吏員が末端の事務處理を擔當する小役人、もしくは行政業務上の必要惡として認知されるのみであることが多かった中華地域の歴史上、モンゴル時代がかなり特異な時代であったことは贅言するまでもない。

さらに、モンゴル時代の知識人像という點に關してより重要なのは、もちろんその實情は個々人で様々であったが、「以儒飾吏」「儒吏兼通」などと稱される、吏員出身で儒學教養に通じた官僚が史料上にあらわれる點である。⁽⁶⁾こうした人々が儒學經典の學習を始める契機には、地方官衙の吏員から入流した叩き上げの人物が、その地位に見合った教養を身につけようとした事例も無論含まれるだろう。だが、より興味深いのは、幼少より儒學教養の習得に慣れ親しんだ、在地の知識人層（いわゆる「士人層」）に屬したと思われる人々（「士人」）⁽⁷⁾が、往々にして吏員から出仕した點である。

科擧の存續を支持する潮流と、道學の影響を受けて科擧に批判的な潮流との對立という觀點から、モンゴル時代初期の知識人の諸相を説いた安部健夫氏の研究以來、⁽⁸⁾モンゴル時代の知識人像が、知識人とはほぼすなわち科擧受験者層という前代までの概念と異なるという點は廣く認識されている。そして、近年では櫻井智美氏や宮紀子氏により、著作の出版審査などを通じた保舉などの、科擧に由らない士人の出仕経路もその詳細が解明された。⁽⁹⁾しかしながら、「儒を以て吏を飾」る官僚の官界での立場や知識人としての自己認識、周囲との關係などについては、實證的な研究がほとんど行なわれていない。

また、舊南宋領ではモンゴルの征服の後ほどなくして保舉や國子監・科擧が整備・實施され、儒學教養に基づく出仕經路が提供された一方、舊金領では金國滅亡からほぼ半世紀以上にわたり、不定期的な儒人の認定試験を除いては、そのような出仕經路がほとんど整備されなかった。かかる状況下で吏員としての出仕が舊金領の士人層にとっていかなる位置づけにあったのかについても、依然として不明な點が多い。こうした現状の背景には、從來の研究の考察對象の大部分が南人（舊南宋領出身者）であり、漢人（舊金領出身者）士人の實像解明が遅れている點に求められよう。

そこで本稿では、各種の叢書や目錄に收録・著録されるが、これまで本格的な研究對象となつたことのない、福州路儒學教授徐東編『運使復齋郭公言行錄』と、その姊妹編であり編纂者不明の『編類運使復齋郭公敏行錄』（以下、それぞれ『言行錄』『敏行錄』と略稱）という二つの書物に着目する。この『言行錄』と『敏行錄』は、郭郁（字文卿、一二五九頃～？）という吏員出身の漢人官僚が至順二（一二三二）年に福建等處都轉運鹽使を離任する際、江南各地での彼の治績を讀めるべく、福州路の學官らにより編纂された。郭郁の行狀などと共に、福建だけでなく浮梁州・高郵府・慶元府などで現地の屬僚や士人から贈られた詩や書簡、そして創建・重修した官學・祠廟に關する碑文などが集成され、順番にそれらを讀むことにより、郭郁の治績と交遊が時系列に沿って浮かび上がる構成をとり、「儒を以て吏を飾」る官僚の實像に對する稀有な情報を提供する。本稿では兩書の成立過程と内容の考察を通じて、詩文や書簡で實際に「以儒飾吏」と稱される郭郁の官界での立場とその周囲との關係を検討し、吏員出身で儒學教養を備えた漢人官僚の、モンゴル時代における位相の一端を明らかにしたい。

一 『言行錄』『敏行錄』の傳存過程

『言行錄』『敏行錄』の内容の検討に移る前に、本章ではまずその版本と傳存過程について確認する。北京の中國國家圖書館には『言行錄』『敏行錄』の元至順刻本が藏される^⑩。それぞれ不分卷で合計二冊。一冊目には『言行錄』の後に

表一 『言行錄』『敏行錄』收錄詩文一覽

ID	冊數/葉數	名稱（「」は假稱）	日付	撰者
1	1/1a-5a	「文仲『敏行錄』序文」	至順辛未孟春之望	黃文仲
2	1/6a-8b	「興祖『敏行錄』序文」		林興祖
3	1/9a-15b	「文仲『言行錄』序文」	至順二年上元日	黃文仲
4	1/16a-18b	「興祖『言行錄』序文」		林興祖
5	1/19a-27b	「運使郭公復齋行狀」		福州路儒學教授徐東
6	1/28a-31b	建安前進士張復奉題言行錄後		建安前進士張復
7	1/32a-33a	福州路儒學陳御史臺狀		福州路儒學訓導梁奎・黃源深・陳文綢・陳康・張英・陳瓌等
8	1/34a-35a	福州路儒學舉狀		福州路儒學者儒蔡潤等20餘名
9	1/36a-37b	福建等處都轉運鹽使郭嘉議義田牒文		郭郁
10	1/38a-39a	國子司業鄧善之選文卿知州浮梁任序	皇慶元年正月三日	鄧文原
11	1/39b-40b	長篇		俞希聖・唐理・僧志勝
12	1/40b-43a	唐律		艮齋・湯炳龍・仇遠ら14名
13	1/43a-43b	五言律詩		胡維杓・僧可權
14	1/43b-45a	浮梁姚疇上知州郭侯德政序		姚疇
15	1/45b-50b	昌江百詠詩并序		
16	1/51a-52a	壽老致政嘉議郭公序	三月辛亥	胡長孺・舒叔獻・張復亨
17	1/52a-52b	趙鎮遠壽詩序		趙鎮遠
18	1/52b-53a	古風		揭祐民・潘東明
19	1/53b-56a	律詩		俞希聖・林德芳ら13名
20	1/56a	壽詞水調歌頭		姚堅
21	1/56a-57a	壽詩後序		李鳴鳳
22	1/57b-59b	壽知州郭公詩		章之才ら11名
23	1/59b-60a	七言絕句		操貴持
24	1/61a-63b	艮齋先生壽倡詩		侯克中・吳迂ら11名
25	1/64a-65b	昌江方希愿上復齋說	延祐甲寅	方希愿
26	1/66a-67a	浮梁州建學序	皇慶元年九月一日	前征東省提舉儒學潘東明
27	1/67a-68b	浮梁橋詩并序		方玉父ら7名
28	1/69a-70b	番陽錢章		
29	1/70b-71a	古體		周伯顔・徐天麟
30	1/71a-71b	唐律		徐省翁・吳旭
31	1/71b-72a	七言絕句		蔡儒貴
32	1/72a-72b	古詞		朱友聞・方希愿

33	1/73a-76a	李天應上秦郵使君郭公善政頌并序	至治三年正月望前三日	李天應
34	1/76a-77b	高沙高方桂錢郭侯詩并序	至治癸亥正月上元日	高方桂
35	1/77b-78b	古體		秦郵郡庠冷撻劉克敬
36	1/78b-80a	唐律		申屠伯騏ら7名
37	1/80a-80b	樂府太常引		劉忠
38	2/1a-3a	秣陵存耕陶璞錢郭侯浙漕之任	至治三年八月朔	陶璞
39	2/3a-3b	范良佐序	至治癸亥	鮑郎場鹽司令范良佐
40	2/3b-6b	古體		儒人符子真ら3名
41	2/7a-10b	唐律		前瓊州軍民安撫使王君濟ら15名
42	2/10b	續添古體		常圻
43	2/11a-12b	民謠十首		
44	2/13a-14a	劉道玄送江西憲使詩		劉道玄
45	2/14a-15a	任江西憲德政序	泰定二年六月癸卯	方君壽
46	2/15a-16a	騷體		苗子方
47	2/16a-18b	古體長篇		鄧茂生ら5名
48	2/18b-23a	律詩		岳天祐ら22名
49	2/23b	五言律詩		王辰・鄭堯心
50	2/23b-24b	七言絕句		晏詠通・戴熙
51	2/25a-27b	問民疾苦		德安縣學儒生潘必大
52	2/27b-31a	唐律		陳宗文・王昭德
53	2/32a-32b	王澤民奉牘即事一首		王澤民
54	2/32b	毫人呂奉和僉憲相公留題梅嶺二絕		呂某
55	2/33a-36b	東湖去思		儒學副提學洪耕ら11名
56	2/37a-45a	福建辭倡	庚午至日	郭郁・尙克和・黃文仲ら13名
57	2/46a-48a	浮梁州重建廟學記	延祐元年三月朔	許師敬（篆蓋）；卜天璋（立石）；鄧文原（撰并書）
58	2/48a-50a	南康縣新建三皇廟記	泰定乙丑歲中秋良日	南安路總管府推官汪澤民
59	2/50a-51b	慶元路重修先聖廟記	泰定三年秋八月壬寅	鄧文原（篆額）；李允中（書）；袁桷（撰）
60	2/51b-54a	慶元路士民去思碑	泰定四年十月望日	鄧文原（篆額）；李允中（書）；曹愚（撰）
61	2/54a-56a	新建南臺鹽庫之記	天曆二年六月朔	張思明（篆額）；李允中（書）；黃文仲（撰）
62	2/56a-60b	福建等處都轉運鹽使復齋郭公愛思碑	至順二年四月吉日	林定老（篆額）；林興祖（書）；黃文仲（撰）

63	2/61a-62b	嘉興樂知本書	樂知本
64	2/62b-63b	吉安王持福書	王持福
65	2/64a-65b	海鹽州儒學教授陶璞啓	陶璞
66	2/66a-66b	白鹿書院山長樂杞啓	樂杞
67	2/66b-68a	臨汝書院前山長郭增啓	郭增
68	2/68a-69a	安成下士李廷傑啓	李廷傑
69	2/69a-70a	醫生臨江楊叔清啓	楊叔清
70	2/70a-71b	建安進士張復啓	張復

『敏行録』が合冊される。行款二〇行二一字。板框高二一〇mm寛二七〇mm。表一は『言行録』『敏行録』所載の詩文一覽であるが、『言行録』には郭郁の行狀を初めとして、郭郁の善政とさらなる昇進を陳情する擧狀、そして義田の設立認定を申請する郭郁自身による牒文の、合計五件の文章が收録される。一方、『敏行録』には、郭郁の知浮梁州赴任を祝った鄧文原の序など、江南各地での郭郁の治績を表彰する詩・書簡・碑文が三六七首・件收録される。『言行録』末尾の「福建等處都轉運使郭嘉議義田牒文」(9。以下、() 中の數字は、前掲表一のIDを指す) は一冊目三七葉裏の三行半を空白のまま残し、續く『敏行録』は三八葉冒頭に「編類運使復齋郭公敏行録」と本文と同じ大きさ・字體で記され、兩書の區別を表示する。なお、『言行録』『敏行録』ともに黃文仲・林興祖の序を持つが、表一にみられる通り、一冊目冒頭にまず『敏行録』の序文を冠し、その後に『言行録』の序文と、『言行録』本文・『敏行録』本文が續く、明らかな錯簡がみられる。また、モンゴル時代に中央・地方の官衙の主催・援助により出版された書物には、出版の経緯を記す公文書が附される場合があったが、『言行録』『敏行録』には刊行に際して上呈された文書(7、8)は收録されるが、官衙からの文書は附されない。前述した編纂上の杜撰さや、次章第二節で検討する出版の動機からみても、『言行録』『敏行録』が官版であったとは考え難いだろう。

また、『言行録』『敏行録』は宛委別藏・適園叢書・四明叢書・續修四庫全書にも收録されるが、續修四庫全書本は國家圖書館の元至順本の影印である。その他の版本でも、前述した序文の錯簡が宛委別藏で修正される以外は、いずれも缺字・判讀不明箇所が元至順刻本と完全に一致している上、文字の相違も皆無であり、明らかに元至順刻本に據っている。

なお、収録・刊行の経緯が唯一記される適園叢書本末尾の張鈞衡「郭公言行錄跋」では、『言行錄』『敏行錄』の著者・内容の簡単な紹介と郭郁の治績に關する感想を述べた後に、「阮文達公が書寫して進呈した書本は、元刻本の空格擡頭を傳えているはずなので、そのまま収録した（阮文達公寫以進呈書本、可傳空格擡寫、均出元刻、故悉仍其舊）」と記される。また、『中國古籍善本書目』（上海古籍出版社、一九九二）には「運使復齋郭公言行錄一卷、元徐東撰。敏行錄一卷、清張蓉鏡家影元抄本、清單學傳跋、繆荃孫跋」との別の抄本も著録される。この抄本が現存するかは不明であるが、傳增湘『藏園羣書經眼錄』卷四史部二によれば、清張蓉鏡家影元抄本の行款は、『言行錄』が九行一八字、『敏行錄』が一〇行二〇字であり、單學傳跋と繆荃孫跋が附される。二跋は同書に移録されており、道光一〇年孟秋の單學傳跋には、「元運使郭郁字文卿號復齋言行錄一冊、敏行錄三冊。芙川張兄が當時の原刊本を得、職人を選んで影寫させ、徐東が編纂した書例をほぼ改めた。まことに今まで藏書家が著録していない本である（元運使郭郁字文卿號復齋言行錄一冊、敏行錄三冊。芙川張兄得當時原刊本、選工影寫、而略改徐東所編書例。實自來藏書家所未經著錄本也）」とあり、この抄本を張蓉鏡（字芙川）が元刊本を得て影寫したものである。宣統辛亥閏二月の繆荃孫跋では、「復齋郭公言行錄・敏行錄は、昭文張芙川が元寫本を影寫したものである。この書は阮文達公が進呈した後、間々傳本があった。（復齋郭公言行錄・敏行錄、昭文張芙川影元寫本。此書阮文達公進呈後、間有傳本）」と記され、張蓉鏡が影寫したものは元寫本とする。さらに、ここでもまた阮元の進呈が言及される。

この「阮元の進呈」とは、嘉慶一二（一八〇七）年一〇月二七日に、長年にわたる江南での勤務と父への服喪を終えて北京に赴いた阮元が、江南在任中に収集した四庫全書未收の書籍六〇種を『味餘書室隨筆』二冊とともに嘉慶帝に進呈したことを指す¹²。この後も阮元は未收書の進呈を続け、最終的に一七三種に上った。『言行錄』『敏行錄』がそれらの中に含まれていたことは、後に阮元自身が編纂した未收書目録である『四庫未收書目提要（寧經室外集）』卷二史部に兩書の提要が収録されたことから分かる。北京の中國國家圖書館に所藏される元至順刻本と、張蓉鏡家影元抄本が據った版本の由

來として最も蓋然性の高いのは、阮元が進呈したこの四庫未收書である。嘉慶帝はそれらを「宛委別藏」と名づけ、移録した上で新たな装丁を施したが、前述の『言行録』『敏行録』宛委別藏本はこれにはかならない。その後、張蓉鏡や張鈞衡、あるいは四明叢書を編纂した張壽鏞がどのような経緯で『言行録』『敏行録』の寫本を入手、または元刻本を影寫する機會を得たのか詳細は不明であるが、元至順刻本と宛委別藏本・適園叢書本・四明叢書本との関係はおおよそ以上のようになるだろう。

なお、錢大昕『元史藝文志』卷七史部・傳記類には「運使復齋言行録一卷 存」「編類運使復齋敏行録不分卷 徐東編存」と著録される。⁽¹³⁾『十駕齋養新錄』卷一三「復齋郭公言行録及敏行録」には「黃堯圃が購入した『運使郭公言行録』及び『編類運使郭公敏行録』各一冊（黃堯圃買得運使郭公言行録及編類運使郭公敏行録各一冊）」と記され、彼が據った版本は吳門の藏書家黃丕烈（字堯圃、一七六三～一八二五）が購入したものであることが分かる。元至順刻本の一葉目などには黃丕烈の所藏印があり、まさしく錢大昕が言及した版本であることが分かるが、阮元がそれを入手した経緯は不明である。

二 郭郁の生涯と『言行録』『敏行録』

(一) 郭郁の出仕経路と官歴

郭郁の父天祐（一二四三～一三三八）の神道碑である、『清容居士集』卷二七「有元故贈中憲大夫中書吏部侍郎騎都尉陳留郡伯郭公神道碑銘」では、郭郁の祖父誠は金末の戦亂により汴梁封丘縣呂村から大名に移住し、「大帥」により千夫長に任じられたとされるが、それ以前の郭氏の状況については何も記されない。表二は『言行録』冒頭の徐東撰「運使郭公復齋行狀」(5)に基づいた郭郁の年譜である。一二五九年頃に生まれた郭郁は、六歳で讀書を始め、正確な時期は不明だが、眞定の侯克中に『易』を學んだ。そして、一九歳の時に「儒雅を以」て江淮行省により江淮行樞密院令史に辟充さ

れる。モンゴル時代の史料には、例えば「儒を以て起家し、保定の校官と爲る」(『滋溪文稿』卷一三「禮部員外郎王君墓誌銘」)や「儒貢を以て、府・寺掾を歴す」(『中庵集』卷九「濟南王氏先德碑銘」)など同様の表現が散見され、通常は、①儒人・學校官の出身であること、②「歳貢」制(各路の保舉を経て、儒人と路司吏數名が、中央の部令史に選充される制度)による出仕、そして③高官・官衙に儒學教養を評價されて推舉されたことのいずれかを示す。

郭郁の場合、父祖や彼自身がいわゆる「儒人の選試」に合格したとの記述は史料上になく、華北における儒人の最終認定試験であった至元一二(一二七〇)年の選試も受験していない(無論、受験して落第した可能性はある)。また、行樞密院令史に充當される歳貢制の経路は史料上確認されない。そこで最も可能性の高いのは、何らかの機會を得て、江淮行省に推舉されたと考えることだろう。彼が出仕した至元二二(一二七五)年頃は、南宋征服により江南での行政官の需要が高まり、吏員からの入流経路の整備が積極的に推進された時期で、臨時の歳貢や保舉が行なわれたとも推測できる。

ともかく、その経歴の初めに首尾よく行樞密院令史に選充された郭郁は早期の入流も可能であったはずである。だが、郭郁はその後ほぼ二〇年経つても入流していない。この間の事跡や郭郁の考えは史料に残されないが、吏員からの入流ではほとんどの任官先は地方官衙で、任期が長期化し昇進が遅れる上、好條件での轉任のために中央官衙にコネを得る機會にも乏しいため、性急に入流するよりも、できる限り中央や地方の上級官衙の吏職を歴任し、高官や中央官衙に人脈を築く方が有利であった。⁽¹⁴⁾この點を考慮すれば、二〇年に及ぶ郭郁の吏職在任の背景にも、好條件での入流への思惑を看取することは可能だろう。

そして、「貞吉河南王」と「性齋右丞馬公」の庇護を得たことにより、轉機は訪れる。前者はウリヤンカダイ Uriyang-gadai の孫、アジュ Aju の息子であり、祖父と父に續いて舊南宋領の経略に従事し、元貞元年には河南行省左丞であったブリルギデイ(Burilgidei、ト憐吉歹)、後者はこの當時の河南行省右丞の馬紹である。この二人の推舉を得て本省幕官に轉任した郭郁は、中書答剌罕丞相、すなわちハルガスンに才能を認められて都省掾となる。大徳九(一二三〇)年には承務

郎宣徽院都事として入流し、大徳一一（一二三〇）年には、承徳郎江浙行省都事として杭州に赴任した。その後、中央では都事・中書檢校など文書行政に關わる中堅官職を、地方では知州を経験し、延祐七（一二三〇）年に父の喪が明けると、知高郵府を皮切りにして、江南の地方行政上の要職を歴任した後、泰定四（一二三二）年に福建等處都轉運鹽使に就任する。吏員の入流までの期間の長期化や、冗官問題が顕在化していた時代背景を考えれば、順調な昇進といつてよいだろう。

郭郁はとくにブリルギデイに厚い庇護を受け、またそれは周知のことであつたらしく、「福建等處都轉運鹽使復齋郭公愛思碑」（62）は郭郁を「左相河南王性齋之客」と記す。『元史』卷一三一「囊加歹傳」によると、ブリルギデイは成宗テムルの死後、ダギの委託を受けて、アウルバルワダ擁立に動いた人物の一人である。⁽¹⁶⁾その結果、アウルバルワダの即位後はその信任を受け、⁽¹⁷⁾皇慶元（一二三二）年には、アウルバルワダ側近の儒臣の一人である王約の推舉により、河南王に封じられる。⁽¹⁸⁾さらに、アウルバルワダの死後も勢力を保持したことは、前掲「福建等處都轉運鹽使復齋郭公愛思碑」の「泰定丁卯（一二三七）冬、朝廷左相河南王性齋の客汴郭公に命じ福建都轉運使爲らしむ」との記述から確認できる。また、『至正直記』卷三「富戸避籍」には「いまひとつ。荆溪・句容・金壇などのところの富戸には、わざわざ良民としての戸籍を避けて勝手に河南王ブリルギデイの養老戸計に投獻するものがあつた。その勢力が盛んなときには頼りがいもあり、かなり満足できるものだった。ところがやがて勢力が衰えると、また正規の税役を徴收されるようになり、しかも養老錢もこれまで通りで免除にはならない（又、荆溪・句容・金壇等處富戸、有避良民之籍而妄投河南王卜憐吉歹養老戸計者。及其有勢之時、可附可倚、頗稱所欲。未幾勢去、復隸常調徭役、而養老錢仍舊不免）⁽¹⁹⁾」なる記述があり、彼の權勢は江南にも及んでいた。カイシヤン即位後の郭郁の順調な昇進の背景には、こうした政權中樞との結びつきがあつたと考えられる。

モンゴル時代、とくに冗官問題により入流・昇進の停滯が深刻化した一二世紀末以降、こうした權臣・高官あるいはモンゴル王侯からの庇護を得ることは、中級以上の官職を手に入れる際に極めて重要な因素となる。⁽²⁰⁾かかる庇護關係は、史料上「徹倅」「僥倅」などと表現されて頻繁に批判の対象となつたが、⁽²¹⁾かといつてブリルギデイの庇護がなければ、郭郁

が三品の大官にまで至ることは難しかっただろう。郭郁もまた、「僥倖」により榮達した吏員出身の官僚の一人とみなせよう。なお、彼には三人の弟がおり、泰定二（一三二五）年の時點では、次弟で「錢穀官」経験者の迪は不詳だが、三弟厚が海道運糧萬戸府百戸、四弟仁が江浙行省掾と、郭郁の所轄に關連する官職に就いており、これは長兄の引き立てによるのかもしれない。さらに、郭郁が五百貫で購入し、義田として有司に申請した安豐路下蔡縣西鄉濁溝の熟地八百餘畝（福建等處都轉運鹽使郭嘉議義田牒文）（9）も、諸弟の任官と同じく、郭郁の榮達による大名郭氏の繁榮を物語っている。しかし當然、庇護關係は庇護主の死去や失脚により解消される。前掲『至正直記』に「やがて勢力が衰えると」記されたように、それはブリルギデイも例外ではなかった。『皇元風雅前集』卷二「挽卜憐吉歹河南王」は、クビライの治世に陳朝ヴェトナムから亡命してきた陳益稷のブリルギデイに對する挽歌だが、その陳益稷は天曆一（一三二九）年に死去している。⁽²³⁾前掲「福建等處都轉運鹽使復齋郭公愛思碑」の「泰定丁卯（一三二七）冬……」という記述も勘案すれば、ブリルギデイは一三二七年から一三二九年の間に死去したと考えられよう。彼の死後、その地位が否定され、子孫が權益を繼承できなかったことは、彼の死後に河南王號の保持者がモンゴル時代末期のフテムル Köketemür まで確認できないことや、『元史』阿朮傳や諸王表などにブリルギデイの存在が一切記されない點からも推測できる。この背景には、おそらく天曆の内亂を経た權力構造の變化があると思われる、それが江南での彼の養老戸計の没落を招來したと考えられるが、詳細は不明である。ともかく、『言行錄』『敏行錄』が編纂された當時、郭郁はその重要な庇護者を失った状態にあった。

（二）『言行錄』『敏行錄』編纂の背景

『言行錄』『敏行錄』の中で、その編纂の意圖に關連する言及は二箇所ある。一つは、「建安前進士張復奉題言行錄後」（6）の「この『言行』錄は必ず編纂され、また加筆されて、未來の歐陽脩を待つだろう（是錄也必纂、纂有續筆、以待他日歐宋云）」、もう一つは「福州路儒學陳御史臺狀」（7）の「本路儒學教授徐東が朱文公の撰した宋名臣言行錄の例により、

翰林元學士（元明善）・袁學士（袁桷）・廉訪馬僉事（馬世德）の作った碑記を採集・編輯して、その要點を抜き出し、『郭公復齋言行錄』としましたので、謹んで前に抄録いたしました。採擇を賜られて特にカアンに報告され、敕命により史館に移されてその勤勞が記録され、人臣の法として示されることとなり、郭郁が清要の位に就けられますよう、お願い申し上げます。（本路儒學教授徐東依朱文公撰宋名臣言行錄例、採輯翰林元學士・袁學士・廉訪馬僉事所作碑記、撮其切要、爲郭公復齋言行錄、謹抄錄在前。乞賜採擇、特以上聞、宣付史館、紀其勤勞、以示爲人臣之法、則寵之清要）である。無論、これらの記述の通り、郭郁が有能で善意に溢れる人物であり、その名が青史に留められることを多くの屬僚・民衆が望んで編纂が行われた可能性も否定できない。だが、前節で考察した當時の郭郁の置かれた状況からは、また別の背景が浮かび上がってくる。

福建等處都轉運鹽使の任期が満了した當時、郭郁の年齢はすでに七〇歳を越えていた。當時、集賢・翰林院で諮問に備える老臣を除く三品以下の官員には、七〇歳での致仕が定められていた。⁽²⁴⁾こうした状況に對して郭郁がいかなる感慨を抱いたのかは分からない。ただし、彼が致仕に備えて關連規定を調べたならば、次の詔書の存在を知っていた可能性が高い。

大德九（一二三五）年六月、欽んで奉じた詔書の中の一欸。「致仕した官員は、……七〇歳以上だとしても、精力がいまだ衰えず、才能・知識に見るべきものがあれば、その者を録用する」。⁽²⁵⁾

現存する史料の中で、この詔書の規定がその後どのように運用されたかは確認できないが、少なくとも明確に廢止・否定されたとの記録もない。もし現役續行を望むならば、ブリルギデイの庇護を失った郭郁にとって、この規定にあるように自らの「才能・知識」が録用に耐えうることを陳情する以外なかったと考えられる。

前掲「福州路儒學陳御史臺狀」（7）の「郭郁が清要の位に就けられますよう、お願い申し上げます」との記述は、かかる状況を背景としたものと思われる。また、「福州路儒學舉狀」（8）では、「福州路儒學者儒」蔡潤ら二〇餘名（おそらく福州路學の學生たち）が、郭郁の才能・德望を絶賛した後、さらに直截に次のように陳情する。

現在高齢に達していますが、精神は盛んです。その清廉な節度は、縉紳の模範となるべきです。その大いなる才能は、

朝廷の重鎮となるべきです。このような大賢者が久しく轉運司の事務に留まって晩年をおくるのは、衆情を快くさせることではありません。省臺に上聞して重任に拔擢され、民の望みをかなえていただくよう望みます。⁽²⁶⁾

『言行録』『敏行録』所載の詩文の作者の多くは、郭郁が赴任した土地の官吏・學校官・學生・儒人など、いわば社會的信用度の高い人々であり、郭郁の治績の實際性に保證を與えている。また、『昌江百詠詩并序』(15)・「民謠十首」(43)などの、不特定多數の民衆の支持を示す詩文も處々に掲載され、郭郁がまさしく官民一體の支持と敬慕を集めたことを強調する。

『言行録』『敏行録』の中に、郭郁が編纂に關與したとの直接的な表現はみられないが、その關與を窺わせる記述は端々に見受けられる。例えば、「建安前進士張復奉題言行錄後」(6)では、郭郁が宣聖廟への眞德秀の從祀を進言した皇慶二(一二三三)年の上奏文が、雙行註の形でかなりまとまって收録されるが、これは當然郭郁から原文を提供された結果であろう。そもそも、掲載される詩文の多くは各任地で應酬されたものであり、『言行録』『敏行録』を編纂した福州路の學校官らが自ら收集したとは思えない。當然、前掲した「昌江百詠詩并序」・「民謠十首」も福州路の學校官らが實地調査して採集したとは考え難い。つまり、『言行録』『敏行録』の編纂自體、郭郁の全面的な關與がなければ成り立たなかった。

このように、『言行録』『敏行録』編纂の背景として最も蓋然性が高いのは、庇護者を失い、致仕を目前にしながら、さらなる昇進を陳情しようとした郭郁の思惑である。なぜそこまでして郭郁が昇進に執念を燃やし續けたのかは分からないが、史料に残る當時の高官の官歴をみると、三品の地方官を勤め上げた後には、中央官衙で高官に拔擢される可能性が十分にあった。あるいは、郭郁はその生涯の締めくくりに朝堂で執政するという夢を捨て切れなかったのだろうか。しかし、前述したように『言行録』『敏行録』が官版であるとは考え難く、また兩書編纂後の郭郁の事跡を記す史料もない。なお、彼の次男渥は泰定二(一二三五)年に國子生であったが、この人物についてもその後の消息は不明である。⁽²⁷⁾

二 「儒を以て吏を飾る」——儒者としての郭郁

(一) 侯克中への師事

『言行録』『敏行録』では、郭郁を讃える表現として「以儒飾吏」「博通經史」「深通義易四書」などが散見されるが、史料から窺う限り、郭郁に對して學問上最も大きな影響を及ぼしたのは、眞定の侯克中（字正卿、號良齋）である。この人物に關しては、『清容居士集』卷二「大易通義序」の、「はじめは詞賦を學んだが、後に悔悟して『易』の研究に専心した」とする記述以外には、まとまった傳記史料がない。しかし、その詩集である『良齋詩集』一四卷には、史格・雷膺・崔斌・徐琰・賈文備・高昉・胡祇適・姚樞・姚燧・許熙載らと應酬した詩文が收録され、著名な漢人官僚との交遊關係が確認される。また、南宋接收後には蘇州に寓居し、前掲詩集に收録された詩文からは、胡祇適・姚樞・姚燧・許熙載らとの、蘇州・杭州などでの交遊の一端が垣間見られる。⁽²⁸⁾さらに、『錄鬼簿』卷上「侯正卿」には「眞定人、號良齋先生。作授鞍和袖挽絲韁有良夜迢迢露華冷黃鐘行于世」とあり、雜劇の執筆も行なっていたらしいが、この項目に對して賈仲明は「史侯心友良先生」と詠じ、眞定史氏の史格との親密さが示唆される。郭郁の出仕に際しても、あるいは史格の後押しがあったのかもしれない。

その具體的な講義内容は不明だが、郭郁は出仕前にこの侯克中に『易』を學び、その間に復齋と號している。復齋といえ、『復齋易說』の著者趙彥肅や陸九齡が帯びた、六十四卦の一つ「復」に由來する尊稱・號である。また朱熹が黃仲本に送った「復齋記」（『晦庵先生朱文公集』卷七八）も著名であり、後に知浮梁州在任中にも朱熹の所説をふまえて郭郁の號と治績を贊美する文章が贈られている（『昌江方希愿上復齋說』⁽²⁵⁾）。郭郁がいかなる意圖で復齋を號したのか不明だが、『易』に對する強い思い入れは看取されよう。實際、『易』學への自負心は、後の彼の江南での事跡の端々に一貫して立

ち現れる。

(二) 中央官界での交遊

一九歳で出仕してからブリルギデイに拔擢されるまで、郭郁の境遇や考えは杳として知れない。その姿に史料の光が当たり始めるのは、都省掾への就任以降である。大徳一(一二九八)年、郭郁はその友人で山西洪洞縣の處士王舜卿への序文執筆を翰林學士王惲に依頼しており(『秋澗先生大全集』卷四三「洪洞縣王舜卿敬親堂詩卷序」)、當時すでに中央官界で著名な文人官僚の知遇を得ていた。また、この頃の郭郁への評價については、鄧文原(一二五九―一三三八)の次の記述がある。

しかるに私は召されて京師に赴き、翰林に「今まで合計で」一〇年留まったが、「その間、」汴梁の郭文卿は中書掾から宣徽院都事となった。薦紳の間では文卿が儒術を好み、吏員として法律事務を掌るものの、奸智を働かせ法律を利用しての榮達を望まないと言われ、私に文卿と交遊するよう勧めたが、ついにその見識に觸れて心を愉しませる機會を得なかった。文卿が再び都事に任じられ江浙行省に赴任してからも、南方から来る者がみな文卿を褒め稱えるさまは、彼が京師にいた時と同じだった。前年(至大三年)の冬に私は錢塘(杭州)に戻り、居所が「文卿と」隣り合ったため、初めて休暇の日に掌を打って古今を論じ、酒を酌み交わして楽しく酔うことができ、愉しみを盡くした。⁽³⁰⁾

この記述によれば、入流に前後して、郭郁は儒學教養を持つ吏員との評價を「薦紳」の間で得ていたらしい。

その後、大徳一年にカイシャンが即位し、江浙行省都事に任じられてから、郭郁の交遊關係は一氣に華々しさを増す。この年、郭郁は袁桷(一二六六―一三二七)と交遊を始め、その父天祐に袁桷が弟子禮を執るまでになる。⁽³¹⁾また、前掲史料にあるように、至大三(一二三二)年には鄧文原と交遊を結んだ。さらに、「運使郭公復齋行狀」(5)によれば、元明善(一二六九―一三三二)は郭郁と「莫逆」であり、郭天祐の葬儀も自ら取り仕切ったという。⁽³²⁾袁桷は後に郭天祐の神道碑銘

や、侯克中『大易通義』序文、「慶元路重修先聖廟記」(59)を撰述し、鄧文原も前掲「送郭文卿赴浮梁知州序」・「浮梁州重建廟學記」(57)の撰述、「慶元路士民去思碑」(60)の篆額を行なっており、その交遊関係は後々まで続いたことが分かる。郭郁が袁桷・鄧文原・元明善らと交遊を結んだ契機の一つは、史料にも記されるように郭郁自身の學識が評價されたことにあるだろう。ただし、もう一つの契機として想定すべきは、郭郁がアウルバルワダの信任を受けるブリルギデイの「客」であり、一方、袁桷・鄧文原・元明善らはアウルバルワダ即位後は、その中央政府に重用される儒臣となる点である。無論、官界での勢力變動が交遊関係を規定する絶對的な要因ではないが、郭郁と袁桷らの立場の近さは注目すべきだろう。このように、學識とおそらくは庇護者の威光により、郭郁はその官僚としての經歷の初めに、幸先よく中央官界に重要な人脈を獲得したのである。

(三) 江南在任中の郭郁

『言行錄』『敏行錄』所載の詩文の作者の肩書きをみると、袁桷・鄧文原を除き、任地の學校官二八名、上司・同僚・屬僚一九名、學生・儒人五名、その他四名となる。「その他」の中には、序文を執筆した黃文仲・林興祖といった任地出身の官僚が含まれる。この他の大部分の撰者は地位が不明だが、在地の士人たちと考えてよいだろう。任地の學校を中心として、郭郁は在地の知識人層とかなり幅廣い接觸を持っていた。交流の具體的な機會としては、「福建酌倡」(56)が作成された時のように、着任時に上司・屬僚・學校官などが一堂に會した歡迎の宴や、「王澤民奉牘即事一首」(53)・「毫人呂奉和僉憲相公留題梅嶺二絕」(54)が應酬された、詩題を持ち寄る會合などがあつた。また、南宋代からモンゴル時代の江南では、州縣學は地方官が在地有力者層の協力を取り付けて統治を行なう場として機能しており、郭郁も在地知識人層との交流の場として學校を重視した可能性が高い。實際、郭郁の主要な治績の中にも、浮梁州と慶元府の學校整備と藏書購入がある。⁽³⁴⁾

『言行録』『敏行録』所載の詩文から窺う限り、かかる交流の中で郭郁が最も強調したのは、『易』に關する學識と、篤實な程朱の學徒としての自らの姿であつた。浮梁州では州學重修の後、「易學を以て諸生を導」き（「任江西憲德政序」(45)）、「復齋」の二大字榜を其の燕寢に掲げ「た（昌江方希愿上復齋說」(25)）。また、「秣陵存耕陶璞餞郭侯浙漕之任」(38)では海鹽州學教授陶璞が、同知兩浙都轉運鹽使司事に在任中の郭郁について次のように記す。

「郭郁は」朱文正公を常に稱えて、「私が平生學ぶことは、ただ正心誠意の四字のみです」「と朱文正公はおっしゃったが」、私は朱文公の如く「かかる學訓を實踐」しないでいられようか」と言い、左右に琴書を置き、粗食に甘んじて蓄財をしなかつた。家の門に客が群がっても、「私の寢床には『易』さえあればいい」と樂しげに言うだけであつた。⁽³⁵⁾

また、道統の顯彰者としての強い自己認識を抱いていたことは、慶元偽學の禁により停滯した道統の復興・宣揚者として眞德秀を朱熹と並べ讀え、その宣聖廟への從祀を建言したとする上奏からも窺えよう。⁽³⁶⁾

さらに、自らの學統に關しても強い關心を抱いていたらしく、慶元路總管在任中に侯克中『大易通義』の出版を計畫し、袁桷の序文を得ている。この書物は傳存せず、その内容については、袁桷が序文で「そこで『易』を精讀し、諸說に遍く通じ、自説を參照して『通義』と名づけた（於是精意讀易、旁通曲會、參以己說、而名之通義）」（「清容居士集」卷二「大易通義序」）と述べるのみで詳細は不明であるが、おそらくは侯克中の『易』學の集大成であつたのだろう。同序文によれば侯克中はこの時すでに九〇歳を越えており、出版計畫と編集作業は郭郁の主導により推進されたとみるべきである。

郭郁のかかる言動をうけて、『言行録』『敏行録』では「讀書を好み、尤も『易』に長じる」（「福建等處都轉運鹽使復齋郭公愛思碑」(62)）など、郭郁の『易』に對する學識を示す表現が散見される。最も印象的なのは、兩書の中で郭郁の學識や才幹を讀える際に頻用される「汾陽」「汾王」「郭汾陽」(二八例)と、「中書考」「中書二十四考」(二八例)なる表現である。これらは郭子儀とその著書『中書令考二十四』を指すが、『易本義』周易上經の中で朱熹が郭子儀を「大人」と賞賛

したことを明らかにふまえる。つまり、郭郁を同姓の郭子儀に擬した上で、その『易』の研鑽ぶりを示唆しているのであり、『易』學者としての郭郁の姿が交遊者たちの間で広く認識されていたことが分かる。

ただし、當然ながら、かかる美辭麗句をもって郭郁が江南士人たちに受け入れられたとは安易に考えられない。郭郁が江浙行省都事として江南に赴任した二年後の至大二（一三〇九）年、鎮江路儒學での張鵬翼（字中舉、河南中牟人）の講義に何回か赴いた前學錄の郭昇が、『雲山日記』の中でその内容を「まるで北方の道端の講談師だ。斯文はここまで落ちぶれてしまった。嘆かわしい嘆かわしい（儼如北方道傍之小說者。斯文掃地一至于此。可勝嘆哉、可勝嘆哉）」（至大二年七月一日條、「田舎者の話は聞くべくもなく、退席した（鄙里之談不可聞、遂出）」（同年九月一日條）と痛烈に批判したように、當時の江南では北方人（漢人）の學問的素養を輕侮する風潮が、少なくとも一部にあったことは留意すべきである。實際、「問民疾苦」（51）では、德安縣學の儒生潘必大が郭郁の治績を讃える中で、「まことにこれは、北方の學者がおそらくいまだ得意とすることではありません（此誠北方學者未能或之先也）」と漢人學者に對する否定的見解を公然と記す。おそらく食用として任地で「胡羊」を飼育していた漢人郭郁も、かかる先入觀から逃れることはできなかっただろう。

また、前人の業績と比較して郭郁の治績を賞賛する際に参照されるのが、范仲淹・蘇軾といった進士出身の名公の事跡ではなく、『漢書』循吏傳であること（「李天應上奏郵使君郭公善政頌并序」（33））や、地方行政を壟斷し墮落させる存在として「俗吏」を批判した後に、清廉潔白な郭郁が民から「父吏」と呼ばれたとの贊辭（「安成下士李廷傑啓」（68））からは、吏員出身という経歴が、良くも悪くも意識されていたことを示す可能性も考えられよう。

しかしながら、實際に郭郁が江南士人の學術活動の輪に關與したことは、『言行錄』『敏行錄』以外の史料からも確認できる。すなわち、『四書通』などで著名な胡炳文（一二五〇―一二三三）の『易本義通釋』に寄せられた、延祐丙辰（一二三二）年附けの郭郁の序文である。不完全な形であって胡炳文は後年後悔しているが、そもそもこの書の初版は知浮梁州在任中の郭郁によって刊行された。⁽⁴⁰⁾當時、胡炳文は郭郁に招かれて浮梁州に赴き、そこで同じく招かれた吳迂（浮梁人、字

仲迂、號可堂」と『易』の四象に關して論爭を行なったが、『易本義通釋』の刊行計畫はこうした交遊の中から生まれたのだろう。胡炳文の論敵となった吳迂は、黃榦の弟子である饒魯に師事し、『吳氏易學啓蒙』を著した浮梁州の宿儒であり、郭郁の委託をうけて浮梁州學で教鞭を執ったとされる。⁽⁴²⁾ 饒魯は胡炳文が『四書通』などの著作で排撃した學者の一人で、前述の論爭の發生はある意味當然であった。なお、この吳迂に師事するために祁門から浮梁州に訪れたのが、『經禮補逸』『春秋胡傳附錄纂疏』などを記し、後に明朝に召されて『元史』編纂に參與した汪克寛（一三〇四―一三七二）である。⁽⁴³⁾

このように、自分自身に著作はないが、郭郁は學術交流の現場の一端に身を置き、その地位をいかして、時として論議や出版の後援者・庇護者としての姿をみせた。そうした姿が江南で好意的に受け取られたことは、父郭天祐の七〇歳の祝いに作成された「壽老致政嘉議郭公序」（16）に、依頼者を選んで撰文することで有名であった胡長孺（一二四九―一三二三）⁽⁴⁴⁾も序を寄せたことや、湯炳龍・仇遠といった、郭郁の管轄地域外で活動する南宋代以後の宿儒の詩文が『言行錄』『敏行錄』にみられることから推測されよう。もちろん、鄧文原・袁桷・元明善らとの結びつきも、江南文人の信任を得る上で大きな役割を果たしただろう。轉任を繰り返す地方官の常として、一つの地域で交遊の範圍を濃密に廣げることが難しかったと考えられるが、知浮梁州を離任してからも各任地で同様な交遊を行なったことは、同知兩浙轉運鹽司事時代の「公はその餘暇には琴書に親しみ、周圍にはみな儒者をおいた（公餘輟暇、親琴書、鴈行抱牘、皆用儒）」（古體）（40）「儒生顧瞻頓首」といった『言行錄』『敏行錄』所載の數々の記述からも窺える。その後、胡炳文のような大物の知遇を新たに得る機會はなかったようだが、兩書に收録される詩文の多さは、郭郁の各任地での活潑な交遊を何よりも雄辯に物語る。

なお、本來ならば袁桷・鄧文原・元明善などの著名な文人たちこそ『言行錄』『敏行錄』の序文撰者に相應しいが、兩書の編纂時にはすでに全員が世を去っていた。もし一〇年早く編纂され、袁桷などが序文を寄せたならば、『言行錄』『敏行錄』の辿った運命はまた違ったものであったかもしれない。晩年の郭郁は、交遊關係でもその據り所を失っていたのである。

おわりに

郭郁の同時代人で、『歸田類稿』やいわゆる『三事忠告』などの著作を持つ張養浩（濟南章丘人、一二六九―一三二九）は、一四世紀前半の中華地域で最も著名な漢人官僚の一人であり、その出仕・昇進のあり方は郭郁と共通点を持つ。祖父は四川行省宣使、父は布衣であり、とりたてて學問上の業績もなかった張養浩は、時の平章政事ブクム Bugun の引き立てで禮部令史に拔擢され、やがて皇太子時代のアウルバルワダの面識を得る。そして、アウルバルワダ即位後は中央で要職を歴任し、知貢舉を務めた実績や學識上の名聲により、死後は「文忠」と諡される⁽⁴⁵⁾。

ここで留意すべきは、この張養浩と、漢人官僚としての最高位を窺いながら果たせず、著作を残してもいない郭郁との差異は、張養浩が出仕當初から中央官衙の令史に拔擢されたことや、アウルバルワダの直接の信任を得たこと、太子文學などの「清要」の官職を勤めたこと、そして何より文人としての能力の優劣など、基本的に庇護者の地位や、出仕後の經歷や才能に由來し、その吏員としての出仕形態ではなかったという点である。郭郁がもし卓越した學識を持ち、最上の庇護者を得ていれば、張養浩と同等の地位と名聲を享受していたとしてもおかしくはない。この点において、從來指摘されてきたように、モンゴル時代における「官」と「吏」との懸隔は非常に狭い。そもそも、士人として儒學教養をいかした出仕を目指しても、郭郁・張養浩が青年期を迎えた當時、儒人の選定は既に終了し、學識の審査やしかるべき緣故を要する保舉での任官は容易ではなく、儒學教養を持ち榮達を求める人材が吏員出身に流れるのは當然であつた。⁽⁴⁶⁾ 道學の徒としての強い自己認識を抱き、『易』に對する學識に基づいて著名な文人官僚や江南士人と積極的に交遊した吏員出身の漢人官僚の姿は、かかる時代背景を考えれば、現れるべくして現れたといえる。この點は、モンゴル時代の漢人士人層と、南宋接收後ほどなくして保舉制度が整備され、それから一世代後には科舉再開の詔を目にした南人士人層との差異、とくに出仕者としての姿の差異を考える際に看過すべきではない。また、一五〇年にわたる南北對峙が解消された當時の中華地

域での文化交流を考える上でも、著名な文人・儒者の事例だけではなく、郭郁のような事例も、より一般的な交流の實相を示すという點で重要であろう。

だが一方で、吏員出身者、中でも州縣の吏員から入流した者を、學校官や歲貢儒人など、明確に儒學教養に基づく出仕者と對置し、その榮達を批判する見解はモンゴル時代初期から連綿と存在していた。⁽⁴⁷⁾そして、とくに翰林院・集賢院・儒學提舉司などによる保舉制度や、科舉・國子監制度の確立・整備により、儒學教養の審査による出仕経路が開かれると、吏員出身者全般に對する否定的認識は史料の中でより廣くみられるようになる。第二章第二節に舉げた、都省掾時代の郭郁への鄧文原の「吏員だが奸智を働かせ法律を利用しての榮達を望まない」という評價もかかる認識の裏返しだろう。これは翰林院・集賢院に召された江南文人に特有の視點ではなく、例えば許有壬（河南湯陰人、一二八七—一三六七）の、「私が朝廷にいた時に、仲舒（李惟閔）は部令史であつたが、かれを吏員扱いしたことはなかった。（愚在政府、仲舒實掾曹、未嘗吏之）」（『至正集』卷六二「故亞中大夫福州路總管兼管內勸農事李公墓誌銘」という發言の背景にある吏員觀は、鄧文原のそれと通じるものがあるだろう。また、同じく許有壬が『至正集』卷三二「送馮照磨序」で、

士人（科舉應試者）は數枚の紙を持つて家を出て、都合一篇の文章さえ書けば、それで立派な官職を得、一般の民より拔きん出ることができる。かの輩（推舉・緣故などによる出仕者）は萬單位の財物を費やしてようやく任官することができ、そのうちまた「その官職を」失うのに、われら（科舉及第者）は「財物など」全く費やさない。胥吏の輩は出仕してから何度も遷轉して「ようやく」俸給を得、「それから」二〇年以上してようやく入流できるのだが、われらは郷試から及第までわずか一〇ヶ月のみ。われらがこの恩遇にこたえるには、いったいどうすればよいのだろうか。⁽⁴⁸⁾

と喝破したように、吏員出身者の昇進速度は冗官現象により鈍化の度合を増し、あるいは庇護を得て榮達しても、郭郁の事例に端的に示されるように、その立場はあくまで庇護者の運命に左右され脆弱であった。そして明代に入ると、吏員出

身者は、州縣・中央官衙の區別なく、モンゴルの中華地域喪失を招いた病根として斷罪をうけるのである。

モンゴル時代の中華地域における出仕経路の多岐化は、前代の進士獨尊の状態から、多様な出身背景を有する官僚が、その思い入れに濃淡はあるものの、儒學という共通の價值觀を抱きつつ並存する狀況を現出させた。「以儒飾吏」「儒吏兼通」といった表現は、儒學教養を共有する「吏」の出現に對處すべく現れた、かかる時代狀況を端的に示す指標なのである。『言行錄』『敏行錄』に記される郭郁の生涯は、そうした知識人をめぐる交雜の斷相を今に傳える、貴重な實例といえよう。

註

- (1) 前近代におおむね「中國」とみなされてきた、一般的に China proper と呼ばれる地域を意味する。なお、China proper を文字通り譯せば「中國本土」となるが、この呼稱は前提としてモンゴル・東トルキスタン・チベット・青海・東北三省などを「中國」が「周縁」として領有する狀況に對して使用されることが多いように思われる。一八世紀以降の狀況に對してならばまだしも、本稿が對象とする時代の史料では、キタイに支配された東北三省とモンゴル高原の南部が、時として舊金領の住人に「中國」の一部と認識されることがあった（古松崇志「脩端・辯遼宋金正統」をめぐって——元代における『遼史』『金史』『宋史』三史編纂の過程——」（『東方學報』七五、二〇〇三）を參照）に過ぎない。よって、よって本稿では、譯語としてはいささか正確さを缺くが、「中華地域」という呼稱を採用する。
- (2) 本稿では、遷轉経路が設定されていた「吏」のみを吏員と呼び、「貼書」「寫發」「主案」などの「吏見習い」と區別する。
- (3) 許凡『元代吏制研究』（勞動人事出版社、一九八七）五二―五五頁を參照。
- (4) 牧野修二『元代勾當官の體系的的研究』（大明館、一九七九）、前掲許凡『元代吏制研究』、Elizabeth Endicott-West, *Mongolian Rule in China: Local Administration in the Yuan China*, Cambridge (Massachusetts): Harvard University Press, 1989.
- (5) 拙稿「金代地方吏員の中央陞轉について」（『古代東アジアの社會と文化 福井重雅先生古稀・退職記念論集』汲古書院、二〇〇七）を參照。
- (6) 「儒學教養により吏員としての才幹を飾る」という贊辭は、モンゴル時代に初見されるものではなく、『後村先生大全集』卷二三「張尚書集序」「莆田使君公之孫也。詞學充宗、儒雅飾吏、既修泮宮、刊艾軒集、迺取家集、而併傳

焉」など南宋代以前の史料にも散見されるが、それらは主に恩蔭により出仕した人物に對して用いられる。

- (7) 本稿の「士人」「士」は、儒學教養の習得に努め、それによる出仕(科擧・保擧など)への志望者の母體となった在地知識人たちを指す。

- (8) 安部健夫『元代知識人と科擧』(『元代史の研究』創文社、一九七二。初出は『史林』四二一六、一九五九)を参照。

- (9) 櫻井智美『元代集賢院の設立』(『史林』八三—三、二〇〇〇)、宮紀子『程復心「四書章圖」出版始末攷——大元ウルス治下における江南文人の保擧——』(『内陸アジア言語の研究』XVI、二〇〇一。後に『モンゴル時代の出版文化』名古屋大學出版會、二〇〇五に收録)などを参照。

- (10) 『北京圖書館古籍珍本叢刊』21に至順刻本の縮刷影印版が、『中華再造善本』には鮮明な寫眞版が收録される。なお、元至順刻本の調査にあたっては、北京圖書館出版社の高柯立氏にひとかたならぬご支援を賜った。ここにあらためて深甚なる感謝の意を捧げたい。

- (11) 前掲宮紀子『程復心「四書章圖」出版始末攷」を参照。

- (12) 『雷塘庵主弟子記』卷三嘉慶十二年丁卯十月二十七日條を参照。

- (13) 『敏行錄』は編纂者を明示しないが、『言行錄』が福州路儒學の學官らにより編纂されたことを考えれば、『徐東編』の蓋然性も高い。

- (14) 前掲牧野『元代勾當官の體系的研究』一六七—一七九頁を参照。

- (15) 前掲牧野『元代勾當官の體系的研究』一九六—二〇一頁を参照。

- (16) 「成宗崩、昭聖元獻太后與仁宗在懷州、太后召囊加歹・不憐吉歹・脫因不花・八思臺等諭之曰、「今宮車晏駕、皇后欲立安西王阿難答、爾等當毋忘世祖・裕宗在天之靈、盡力奉二皇子」。囊加歹頓首曰、「臣等雖碎身、不能仰報兩朝之恩、願效死力」」。

- (17) 『元史』卷一三七察罕傳(「仁宗」顧李孟曰、「知止不辱、今見其人。朕始以答剌罕・不憐吉臺・囊加臺等言用之、誠多所益。……」)。

- (18) 『元史』卷一七八王約傳「皇慶改元元日、詔中書省曰、「汴省王右丞可即召之」。約以三月一日至、召見、慰勞、特拜集賢大學士、推恩三世、贈諡樹碑。約首奏、「河南行省丞相卜憐吉臺、勳閥舊臣、不宜久外」。召至、封河南王」。

- (19) この史料の解釋と意義については、植松正「元代の賜田についての一考察——その返還の動向を手がかりとして——」(『元代江南政治社會史研究』汲古書院、一九九七。初出は「柳田節子先生古稀記念中國の傳統社會と家族」汲古書院、一九九三)一七四—一七七頁を参照。なお、譯文も植松氏のそれに據る。

- (20) かかる庇護による任官・昇進の具體的な實情の一例としては、『道園類稿』卷四三「王伯益墓表」を参照。

- (21) 『秋澗集』卷三五「上御史臺書」、『石田文集』卷一三「彈中書參議博囉等官」などを参照。

- (22) 『清谷居士集』卷二七「有元故贈中憲大夫中書吏部侍郎

騎都尉陳留郡伯郭公神道碑銘」「公男四。長、亞中。次迪、嘗爲錢穀官。厚、海道運糧萬戶府百戶。仁、以黃陂主簿、今爲江浙行省掾」。

- (23) 『元史』卷三四文宗本紀三至順元年八月戊戌條「益稷在世祖時自其國來歸、遂授以國王、卽居于漢陽府。天曆二年卒」。

- (24) 『大元聖政國朝典章』（以下『元典章』と略稱）典章一吏部卷五・致仕「年過七十依例致仕」「致仕陞散官一等」を参照。

- (25) 『元典章』典章一吏部卷五・致仕「致仕家貧給半俸」「大德九年六月、欽奉詔書內一欵。致仕官員、……雖年七十以上、精力未衰、材識可取者、錄用之」。

- (26) 「方今齒德俱尊、精神亦壯。其清風峻節、以爲縉紳之儀表。其大材偉器、可以爲廊廟之棟梁。似此大賢久淹漕計、駿尋晚歲、未愜輿情。欲乞上聞省臺、居擢重任、實附民望」。

- (27) 『清容居士集』卷二七「有元故贈中憲大夫中書吏部侍郎騎都尉陳留郡伯郭公神道碑銘」「子三、澍、渥、國子生。壽、早卒」。

- (28) 「先生幼喪明、聆群兒誦書、不終日、能悉記其所授。稍長、習詞章、自謂不學可造詣。旣而悔曰、吾明於心刊華食、實莫首於理。理以載道、原易以求、則爲得之。於是、精意讀易、旁通曲會、參以已說、而名之曰通義」。

- (29) 「豫客姑蘇王御史持李鵬舉書至知檢討太常以詩答之」「與諸相宴西湖」など、『艮齋詩集』卷五・六所載の詩文

を参照。

- (30) 『巴西集』卷上「送郭文卿赴浮梁知州序」（9）「然余徵詣京師、爲詞林屬、留十年、汴梁郭文卿由中書掾佐宣徽華、薦紳間、往往言文卿雅尚儒術、其爲吏持三尺法、而無舞智深文、以微榮寵、且勸余與文卿友、而余竟不獲一接言論以自快。及文卿再調都事江浙省、凡南來者道文卿之善如京師時。前年冬、余還錢塘、居相隣、始得以暇日抵掌論說古今、醞酒醅譚、意懽甚」。

- (31) 『清容居士集』卷二七「有元故贈中憲大夫中書吏部侍郎騎都尉陳留郡伯郭公神道碑銘」を参照。

- (32) 「延祐五年、……八月、丁父嘉議府君憂。始翰林復初元公號一世儒宗、少所許可、惟與公莫逆。嘗思公之先君子嘉議府君有隱德、時相過住、輒拜牀下。歿之日、元公躬治葬事、慰賻銘祭、情極懇、至敬有餘也」。

- (33) 方誠峰「統合之地…縣學與宋末元初嘉定地方社會の秩序」（『新史學』一六一三、二〇〇五）を参照。

- (34) 『巴西集』「浮梁州重建廟學記」（57）、「清容居士集」卷二七「慶元路重修先聖廟記」（59）を参照。

- (35) 「常稱朱文正公謂「吾平生所學、只正心誠意四字」、我豈可不如朱文公」、左琴右書、朝齋夕薺、家無私積。門雀籬午、惟熙熙然曰、「吾床須易在足」」。

- (36) 「建安前進士張復奉題言行錄後」（6）所引「晦庵朱子集厥大成、一時橫遭禁錮、罕能傳習。又得西山眞文忠公、發揚推闡、公論開明、所著大學衍義一書、君德治道、多所在裨益。……是二儒者、時雖不同、其傳紹道統、則一而已」。

……朝廷永錫善類同列從祀、其於民化誠非少補云。

- (37) 『周易本義』周易上經「夫大人者、與天地合其德、與日月合其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶。……回紇謂郭子儀曰、卜者言此行當見一大人而還、其占蓋與此合。若子儀者、雖未及乎夫子之所論、然其至公无我、亦可謂當時之大人矣」。

- (38) 「昌江百詠詩并序」(15)「市民大斃使君羊、不學前官責倍償、赦彼慚顏懷厚德、易牛仁術笑齊王」への雙行註「市民有犬嘗斃前任官羊、而倍償。至是、又斃知州胡羊。民願償之、公但令勿畜此犬而已」。

- (39) 朱熹『名臣言行錄』などの影響により、南宋代江南では范仲淹らが地方官の理想像として廣く定着していた。小二田章「名臣」から「名地方官」へ――范仲淹の知杭州治績に見る「名地方官像」の形成」(『早稲田大學文學研究科紀要第四分冊』五三、二〇〇七)を参照。

- (40) 『雲峰集』卷一「與草廬吳先生書」(「本義通釋、則郭文卿守浮梁時、爲刊其半、出之太早、炳文今悔之無及」。

- (41) 『雲峰集』卷一「答敬存胡先生初翁書」(「并浮梁策問、必出吳可堂之手。十年前、郭文卿爲守時、曾相聘至彼、可堂謂、左撻掛一、右亦掛一。炳文答之曰、如此則不是象二、自是象四矣。可堂堅守其說、不肯改其辭也」。

- (42) 『經義考』卷四四易四三「吳氏易學啓蒙、佚。黃虞稷曰、迂字仲迂、浮梁人。從饒雙峰學。皇慶間、浮梁知州郭郁延之爲師、以訓學者」、乾隆『江西通志』卷六三名宦七・饒州府・元「郭郁、字文卿、大梁人。皇慶間浮梁令、……自

比趙廣漢、聘吳仲遷爲弟子師」。

- (43) 『新安文獻志』卷七二「環谷汪先生克寬行狀」(「至壬戌春、處士君同先生往饒之浮梁、拜可堂吳先生仲迂于州學。……及以所爲文印可於吳先生曰、讀書明理蘄體、諸身文章、異時可不學而能也。先生既得吳先生之訓、遂篤志聖賢之學」。

- (44) 『遂昌雜錄』(「金華三胡先生、……次汲仲、石塘人也。……客於杭居、貧甚、以古文倡、人求記碣序贊、稍不順理、雖百金不作也」。

- (45) 『牧庵集』卷二六「朝列大夫飛騎尉清河郡伯張君先墓碣」、『文獻集』卷一〇上「故陝西諸道行御史臺御史中丞贈據誠宣惠功臣榮祿大夫陝西等處行中書省平章政事柱國追封濱國公諡文忠張公祠堂碑」、『元史』卷一七五張養浩傳を参照。

- (46) 『至正集』卷七五「吏員」(「欽奉聖旨節該、漢兒吏道、從七品以上休委付者。教授・秀才并職官內取的令史、依舊例委付者」……但科舉未行之時、以吏取人、實學之士、亦未免由此而進、一概限之、不無同滯」。

- (47) 『中庵集』卷一一「先府君遷柩表」、『西巖集』卷一三「議科舉」などを参照。

- (48) 「士出門持數幅紙、始終綴文才十一首、即得美官、拔出民上矣。彼輦金舟粟費以萬計得一命、尋復奪之、而吾一毫無費也。胥吏輩自執役幾轉而得祿、少不下二十年始出官、而吾自鄉試至竣事才十月爾。則吾之報稱、宜何如哉」。

essence, trade across great distances in central Asia was conducted in caravans that were organized and dispatched by both nomadic and oasis-centered states and other groups, and as they developed they attracted and absorbed various individual Sogdian merchants. For the oasis-center states, the reception of missions of various nomadic groups was a vital enterprise that might determine the fate of these states.

The formation of powerful nomadic states in central Asia brought about the formation of symbiotic relationships founded on the political relationship of lord and subordinate between the khans and oasis-centered states, and under these circumstances the dispatch of missions by states and other groups became nearly regularized as the formation of a broad order that stretched across the steppes and deserts was formed. It was these circumstances that caused trade in Central Asia to thrive.

**ON THE COMPILATION OF THE *YUNSHI GUOGONG FUZHAI*
YANXINGLU (A MEMOIR OF HIS EXCELLENCY, FISCAL
ATTENDANT GUO FUZHAI): SCHOLARLY LIFE AND
SELF-CONCIOUSNESS OF OFFICIALS WHO ROSE
FROM THE RANKS OF LOWER-RANKING
CLERICAL OFFICIALS IN THE
YUAN PERIOD**

IIYAMA Tomoyasu

This article is an attempt to shed light on the scholarly life and self-consciousness of officials who started their careers as low-level clerical officials and later rose to higher officialdom in the Yuan period. As the civil service examinations played a limited role under Mongol rule, a considerable number of local literati chose to serve as clerks to enter officialdom. At times, such low-level officials were praised as “scholarly clerks,” 儒吏 *ruli*, in contemporary materials and they formed the main source of officials throughout the Yuan period. However, we understand little how “scholarly” they were, especially in comparison with scholar-officials who passed the civil service examinations. Based on two memoirs of a fiscal attendant in chief named Guo Yu 郭郁 (ca 1259-?), who was also promoted

from the position of clerk, this article examines his self-consciousness, relationships with other scholars, and reputation as a scholar.

Poems, letters and commemorative inscriptions contained in *Yunshi Guogong Fuzhai Yanxinglu* 運使郭公復齋言行錄 clearly indicate that Guo Yu was strongly conscious of himself as an outstanding scholar and was especially proud of his knowledge of *Yi* 易 (*The Book of Changes*). As described in his memoirs, he eagerly looked for a connection with contemporary leading scholars at the Court and local literati in Jiangnan in order to join scholarly society. According to poems and letters presented to him, this attempt gained remarkable success, and he even went on to patronize the publication of an annotated text of the *Yi* in Jiangnan. At the same time, he successfully secured the patronage of a Mongol noble at Court. As patronage was an essential factor for aspiring officials and clerks to gain a higher position, Guo was successful not only in scholarly society but also in officialdom.

His career as a clerical official seemingly posed no hindrance to his scholarly activities. However, it should be noted that he obviously could not keep on enjoying success after the death of his patron Bürligidei, who had had considerable influence at Court and in Jiangnan, and consequently few sources, except the memoirs, mention his name. In short, Guo's life is a mixture of traditional scholarly life and the new clerk-officialdom that emerged under Mongol rule.

Many Yuan sources indicate or directly express the superiority of "authentic" scholars (they were usually scholar-officials who had gained their positions through the civil service examinations, or local literati who clung to the traditional notion of official-clerk boundaries) to clerical officials and officials who had risen from the ranks of such clerks. On the other hand, in the Yuan period, it was not difficult to find dignified scholars who were promoted from the ranks of these clerks, such as Zhang Yanghao 張養浩. As the life of Guo Yu clearly shows, being a scholar-official was not as simple a matter as it had been in earlier periods of Chinese history. The multi-routed recruit system that the Mongols established in China changed the standard for becoming a scholar-official, who during the Song and Jin period had only had to pass the civil service examination. This resulted in the emergence of new scholar-officials who did not cling to the civil service examinations. This diversity of scholar-officials marks one of the most remarkable traits of multi-cultural Chinese society under Mongol rule.